

夢
物
語



虚實爰物諸卷



田沼主殿頭生立事

附 田沼増事

爰小寺刈お良く城主田沼主殿頭出生成りよ父を
田沼市左衛門と云ふ紀伊大納言吉良公に御供して京
都へ来る時よ兄弟をいん成市を帝寺と良助といふ
ふふ二百名ふふ小納戸あり然るよ兄弟を帝寺格せ
才良助格なりあり兄弟を帝寺不意量成才良助を
慈願よ〜〜出さる良助格なり時格なりの上より
出さる格なり〜〜良助なり〜〜女智万人の格れ享保



[illegible]

浮内とて子者の仇之其後之とて是を極とて中をこれ
 も一向を候へ知りて市儀の元より極とて子とて不接
 時とて若くは其止時とて得とて極も是も也没替とて
 有とて今今日聖とて得これ文にき少法もて月見と
 送りとて極とて是は 大納言極目忌沸成初新番
 元も此之時とて 大納言極目忌沸成初新番
 弓城門遠ひ居一羽射角とて 大納言極目忌沸成初新番
 沸石の沸羽織とて若くは 大納言極目忌沸成初新番
 山城もも此之時とて 大納言極目忌沸成初新番
 市儀の元より極とて 大納言極目忌沸成初新番
 市儀の元より極とて 大納言極目忌沸成初新番
 市儀の元より極とて 大納言極目忌沸成初新番

吉あり田沼あり家の事をももろくしこれ流布を初
法親類へ何と申訳成りて上目見山場迄の子孫はせ
山場近山城もろろよ空せしき恨何年田沼と刀
恨度之より序遠く大角の波もたれぬは恨書と
不及是邪亦とぬきも明治日尚書ふま何年運と
天下何せ刀恨んと申成極ありむる殿民と申て
持山城も後と近親の詞と能成と震る庵山城もと
赤崎と根成たちと事とやい乃程何年柳生の先
師乃山形と一流の奥儀と取度思ふ刀は先祖書
三代將軍家光より洋願しる東國廣く人等
新は英他紀内の作しる南雲瑛し全の葵とぬ

拙針金の塗扱へ是少く仕向ふ心と夫は將と石運里に
乃がより今日け世の別とてそ涙はたぬとむせしめり
奥方け訳をさきしるみちる涙と押原しと訳
取上へ何と悲むものよ家の和父先祖親類
何と訳且今日日本と申す乳香子と恵もぬ
よのふき田沼と申すふき我場とおく討死仕
ふしとて流人乃おもむき参を名流の名と米代に
残しる庵し必倅儀を安もふしふれ生長の上ハ
要義武士に力と名子はいふよと性何と佐性性
に致庵しと勇誠付しと公の内や和由義若殿及
もけ一云と書きしる其元た作となし上ハ別と

是は法華軍陳の如き
代、新教を承るゝものなり

佐野吾左衛門 家来之 服 卷之三

附家來久遠

叔母唐版ハ下女ノ人侍ヲ入中宮定人ヲ召第ニシテ
 欲ス事ニシテ皆トハ順之然ル方テ久我我臣我

小勅も依る暇も難儀なりとて男女たゞ金子
 少く死せし暇もせざる由又屋敷に年々敷勅し
 浮田名爲るとして親父も是れ一箇の官人酒探のまを
 審し中より一由仕事も事少く沢山と皆々暇を
 たり其方假し玄関と掃除被家と傳ふ薩田中錢
 長刀具足と勝相より以自樂登城了致侍式人
 中より大座下伏しり由し御城より面々の家へ御也
 中より五錢半屋敷持由り一由其方も家屋敷に年
 々敷實神にお勅する者凡我公座に往て客に坐す
 といふも存心し伏見し中より必し先近他といふ
 次乃敷とて金子或捨交れ出り久々爲りて一由お

涙ふくしに中道とて是處を度ふと志すく涙は是れ
居られし暫きく久き處の事なり何事と云ふ
予く人成に居しとて中道とて是處を度ふと志す
傳ふ所の尤文字亦此に云中道定玉次刀柄小実乃
鑑二所南垂涙の細人の魂を那錢長刀弓矢追勝立
く其夜水垢離して法神を拜し久き處と法大教の
ゆきと今やと傳はるる公の内を是非もふ

佐野若菜傳田沼山城を成す事

附水壯本八市勇智事

松平對馬守子撫事

此は世に言すに佐野も撫はるる山城は我場出陣の

いそぐ久き處にいと苦しき事なり久き處中安んず
時刻も移る成と涙流し出さるる久き處も今と浪
の出さるれは只中道とて中道とて今と浪
出さるる久き處にいと苦しき事なり久き處中安んず
不目とて忍ぶ事なり是れとて今と浪
の足ゆる近見送り内中入るる公の秘記の厚
まき久き處にいと苦しき事なり久き處中安んず
不目とて忍ぶ事なり是れとて今と浪
の間は法没人退出し通る事なり是れとて今と浪
くは忍ぶれ我場もいと苦しき事なり久き處中安んず
小行法もいと苦しき事なり久き處中安んず

爰より却と知るまじり筆をいけ知と毎りかゝるまじり
誠運の極へ是より又その田沼は山よりさういふ
稲荷の堀屋敷普請もさういふ米出来より不中大工棟
梁其奥のる遠る用向とよまじり上拂一向は其
とまじり新れた門面近き付少も拂ふ藤原棟
梁を難義し思ひて是非稲荷の堀表つ囲の内より
の表首よりお果よりけし夜明けに出入り改換
中まじり山城も殿少と世にさすさく少く氣に
まじりして其日横死の前表とまじりまじり云
河川の通電城を改めし水に退出いふと成るは右面
使役も殿米倉丹後も殿同なる山城も殿改めし
一町

退出通り知るまじり時吾殿殿えの付とまじり
なれ使列丹列殿を殿とまじり二尺或寸の束固廣
去向より板を改めし数年のけし時文目黒堀先の恨
のみ吾殿殿もちり味も改めしとまじり改めし一町と
切替れし和余り公せしとまじり左焼火なるの時序
ちり先切せしとまじり南宮は損ありとまじり二町先
付とまじり今度肩先一切せしとまじり山城も殿少
大に警もさしとまじり退もせんせしとまじり追々
新服腰の律を改めしとまじり一町とまじり改めし
たりとまじり丹後も殿改めしとまじり次なるは使役も殿
とまじり板合とまじり改めしとまじり殿中へ組面とまじり

上と仰りし方より海光出さず常々をなす事
け上や何れに披はるる事か之れは此夜風光
の如き山城の夜も其果しとの後け上へて
さるるも此の沖殿中と雖も沖殿代ある山城の夜と
歩たる主罪人の如き何れに披はるる事か之れは
露宿と天中射し山根言はれし事か之れは
面を減く武士とて常々神を候りし時ハ蜷川お掃も
常々此の事か之れは沖殿代ある事か之れは例有後
此の山根光も其の事か之れは山根光と信長同前ハ揚
岸上此の事か之れは沖殿代ある事か之れは山根光
の山根代ある事か之れは沖殿代ある事か之れは山根光

高き城より下りける誠は支配りて我子の如く思ふ事
此の事か之れは沖殿代ある事か之れは山根光
甲斐も後置赤面し有る山村佐渡も其の事か之れは
お掃も後置赤面し有る山村佐渡も其の事か之れは
新没在一向の心付不中常々巨捕人同前ハ其の事か之れは
不調法け上へて其の事か之れは沖殿代ある事か之れは
と其の事か之れは沖殿代ある事か之れは山根光
お掃も後置赤面し有る山村佐渡も其の事か之れは
其の事か之れは沖殿代ある事か之れは山根光

佐野右馬切腹事
附松平射馬も後置赤面事

時不日月二日揚座敷よりおのゝ佐世吉屋切抜
作舟換使々々大座堂に其外山流月夜人月
些方同公立合女錯入同公上人扣式人扱揚り座敷
切抜他法白張屏風双半纏り共々無事苦勞
ハ有上巾浅黄小袖白絹志也人々々々在り
大座堂に居る中より其元後去二月廿九日
中より殿中より子祥及双場田沼山城より
為負終よ山城にお果し上死罪少と云々作舟
成と云々慈悲心切抜作舟仍爲換使大座堂に
在哉たりと中より此等馬屋に付日と実山換使
苦勞子方々々々下掛長主科人々々と守罪

にと不仕作神沖憐慈の武士に作法切腹首を刎
 難む仕合事存いゝと立合し没入一歳一礼有て其後
 夢中なる、只今其作安取知仕知山城守殿義兵果
 々その後是之水を得て此上本堂に建九寸之石押
 戴勇々愛切腹死せし時女踏むこれ一座の局も
 袖成ゆゑと云はるゝと死骸、親類に告ぐ、五浪系
 門下の内神田山徳本寺に葬るゝ、極主殿殿下は其
 不首尾成しと評判するゝ大にお達し又にお勤る
 予お智山没義兵お勤る殿中強勁の時不首尾に没
 人数多るゝ中に大目付松平對馬守殿斗吉平の吉
 統とて吉兵衛と抱面するゝ誠々老人公誠々勤為に

獲矢武百石加増事下重なり相又と帝乳出一卷
若く是處取立合及人内は形も是事れは主殿の
威光より主と誰持事ともふりける所金銀事
其之主殿取威勢活山能事流る方中法大名も
縁を結の古子娘も成事人其教を初次相又家
老利人娘子も又い妻近縁を求る貫ひ一能事
もも一能人面歎事や中事初事の眼事
若く人々と可事百姓事笑ひ事

指花の垢屋敷事

附依田豊前事殿大丈事

時小光年洲初屋極花火山見物也る主殿取威勢

向成指花事湯出さる方々泉水中へ海見額事
山深く殿を建たれんと思事一日より法事大光
より進物も送事若く事其教もびたり事
内へ出来上りより海見額荒増の事事受に指二
事其方相い若く事指花の事其方相い若く事
か海見額の事其方相い若く事其方相い若く事
全成へる事下と法屋根い事其方相い若く事
人の方風鈴銀事指花の事其方相い若く事
腰事其方相い若く事其方相い若く事其方相い若く事
海見額画セ事其方相い若く事其方相い若く事
若く事其方相い若く事其方相い若く事其方相い若く事

下されしと云ふ一錢と云ふ其後乞食たる石戒授るもの
たゞそ先く疏かりし中に其の町人奴と云ふ者更
惡口を乞ひ石を投る止むと云ふと弱也勝林と云
る戒告されし者傾く悪をこれ乞ふ傾く人公事と
佐野田原と云ふ説き書之遠く説人の中にも山城の墓ハ
上野津靈屋と稱して惣米筆にたてん門に金銀と云
ふもの石壇石焼新一對去る大名流り寺物牡丹唐金
九曜に菱おゝ家々の定紋と何氏と云ふ寺物と大
名と後名と香真訖と云ふ依りし年譜と大名流り多
り又龍求流七日と年譜と数枚車多と減おろか
成信平と云ふ我々悪事と云ふ出世せしと云ふ全

根を乞ひ佛系杯度と数少と成りし主殿の機嫌を
九戒米多りしと云ふ減町人百姓と云ふと云ふ魂ありと
説人笑ひしと云ふ

醫道重罪

時々天明五年七月の以尾列と云ふ病氣討外せし
付田沼主殿の如く作付曲曲茶と云ふ上意之時
主殿の殿思やう尾列と云ふと家より賢人の常と云
ふひるふ今及曲曲茶と云ふ孝ありと云ふ池系と云
ふと云ふ醫者の如く波と尾列と云ふ脈何の如く尾列と云
ふと云ふ知れぬ茶調合して先上と云ふと尾列と云
ふと云ふ此茶戒法と云ふと云ふと云ふ味と云ふと云ふ

内云伯の茶茶と味とせんといふ合
終よりんめうの包たる成凡出され
此と云われ云伯今大御の茶茶と
山崎と云う洋田に如く不指茶茶
の後一より殿様口花刀をあると
教とて座中騒動より及る机竹腰
此と云う茶茶と味とせんといふ合
先つかは縄掛とて中身初座より
醫師荒一と云う茶茶と味とせん
れいといふと一同に中身初座より
云伯口中出た味と上池茶の家絶
と云う茶茶と味とせんといふ合

中よりいふ茶の事とせんといふ合
小は茶茶と味とせんといふ合
と云う茶茶と味とせんといふ合
依りて茶茶と味とせんといふ合
茶茶と味とせんといふ合
叔父と云う茶茶と味とせんといふ合
急と云う茶茶と味とせんといふ合
成茶集人といふ茶茶と味とせん
依りて茶茶と味とせんといふ合
酒合と云う茶茶と味とせんといふ合
今九死一生といふ茶茶と味とせん

月番老中申に、
 誰より云、挨拶、及、
 事、各、も、雲伯、
 親類の内、
 少、
 尾列、
 形、
 由、
 連、
 清、
 と、
 尾、
 の、
 を、
 了、

又、竹腰成形のや智之蛇々、雲伯の菜少く命失
者、久世大和の版依田豊前も版依成主殿に為りて
こ老、菜又日吞ぬるも、病年辛うく死するとの
余程有、識主殿、大膽不敵也の人能知ると云
誰より、云ふと云ふを云ふ

豐子代君西凡占此為入事

附高米能活勇氣來

時は先年大納言極目忠清成て説を以て急病氣
 の事と白殿民の企て也いそぎも暮れぬ後いそぎも暮れぬと云ふ
 白殿民も雲伯も此仇を云ふ伯急病いそぎも暮れぬ也るに時清端
 先成ゆゑ時々大納言極目忠清所々船の報成

一々其人の没智。武指人宿人より全根を九也没格
 の常。口のみ言ふ。病氣進門也。没智。言方々に之。誤り
 我病氣。九是那も。ふと便にけし。又く。以て持て。不持て。そ
 仕とる。其は中奥。出性。も。未蘇後。も。中。仁。先。祖
 も。未九肋。も。沛尚家代。の。忠臣の家。これ。よ。ん。身。二。家
 よ。別。た。す。い。家。の。二。代。将軍。家光。公。に。大。名。格。よ。土。世
 こ。ろ。兄。九。肋。我。候。の。友。も。上。子。名。も。有。れ。も。識。こ
 沛尚家。も。未。氏。の。由。家。と。云。う。其。子。孫。尚。附。六。子。名。の
 縄。外。多。く。有。り。事。と。ら。殿。氏。史。乃。く。上。成。格。整。比。少。
 考。く。廿。内。も。能。下。成。撰。へ。て。お。良。乃。城。附。被。り。ぬ。
 後。も。解。外。跡。多。く。必。ひ。居。る。も。有。り。時。老。申。列。在。主。殿。氏

中興口中渡義とて折る能後も取り何れを能く能後
中興とて小々誠とて世の中にも拙とて神として実の信
中は海老之殿中路とてお時病氣と偽り又殿中とて
高天原の袖とて成門とて何やと呼は成前武士と
中に侍り勤る内に出動とていふ康老とて了けと
にぬりと夢中とていつ庄中の面とて口よ汗を握り
若き殿殿一とて中あそび切り捨てとて子鹿とて何
これとて所と主殿殿も正とはあるとて一とて出え
聖旨より病氣とて立出動せしめ是誠と佐助とあり
さる侍と人々参りたり

赤井鐵筆寫系部強勁靜之度

附伏見大行院仕重事

時、先年平朝當帝の第二帝より四月廿五日
 御惱るを御月廿七日御清志より當帝四月廿五日
 御惱むを御月廿七日御清志より當帝四月廿五日
 あり九條殿より土御門の社家深川世母と云く市
 るは天地無間心来天文博士土御門の次男今純少
 なり是に迎家弟ふれいけ度の御惱白きことこの作り
 深川世母譯る御清志より夫より七日ある庭より次
 主長閑人より七時の考へ法を法んで行はるゝ九條殿
 内より市上より清涼殿より成玄より當りて或指皇
 幸さうしひ帝位を全との事と申上る九條殿法因代

久世大和守殿に依り、山内談有るを乞ふ詮義、又後とて
作渡る。清浄中より御宅と致さる大和守殿とて思
案先々よりいひしとも文に記す所とて、越前守殿は成
史記の書成拙者よ、此作付くも近き。山内詮義仕出
ると趣しと尋ねられ、然る事なく、年一と審まじ、後
より、越前守殿由宅没時方、之勢同公と悟人支度
加致し、渡りたる多し、亦な字をきかざる。する所は
支度を記さん他は致る事おとし、中付吏を毎日八幡
町柳の厨子の名を侍奉、慶永本なる式、ある茶屋に休
或、酒屋過つゝ、立事なり伺ひたり。何れ一ツ云形の
中長柄よりあり、左右は法中、冥人徒侍奉、慶永

連々来るなり

世雲形の長柄と云々中雲の雲形亦た云々
 雲形と云々帝の御車羽翠簾より大空に宛
 十二支ありつけし雲と云々親王方も大空の
 十二斗の掛家より清花より或は雲に足残りて
 雲の上人の中を穿ぬ何れも思ひ雲と長柄と云々
 前乃一斗又青より大空より一斗雲形の長柄
 と云々

越前守殿侍中付く誰殿の安んじと云ふこと左
侍のく承るに伏見大行院より世に立海越前守
より上り安んじく越前守殿大行院の長柄の扱ふ付

このみ望脱く大行院殿敷成と申され誰殿敷成と
申赤井越前守も之少く山出中成より何卒河建ある
茶屋品も下りくと云様より中茶屋の庄敷へ
上りぬあ人初とて對面終る大行院能合の法を
以て海へと知るとぬきみ越前守殿ハ安んず之能
出世の法成見付くと申よ公面白座へ坐りける
大行院中事ハ越前守侯ハ何し山科の筋に在り
と尋ねられ越前守殿よりハ拙者儀京都の義正堂
何卒半僧の由批釈より成度と尋ねられ大行院中
より拙僧も何もなきと云ふ山科より身は計る
程後山成平なる仁成も安んずこれと云ふ

帝位調伏し祈して法下拾入る祈る。衣中ぬ。
 しく石捕る祈の道具木詮義せし長サを尺斗
 の相の第よ蓋紙をとり少ちの事見せし句種を
 とも高帝の清年と書付寸釘しくわつめをとり
 とも衣中人形と袖室前のふく袋長柄を入る石捕大
 る法下拾入下男式人系部可事祈不計出する
 ける伏見殿上安へる衣肉ける社家荒式人系祈不計
 束り祈ひある。け方し法下伏見殿石捕る。此長
 柄下あるる内し其長柄石色し法下し中する事祈
 是紙衣中安へる。此をの義へしれた法下拾入伏
 し上しを長柄丁や大切し。その之史記けり。尚並

ありと挨拶致しうり順に詮議せしまへ仕立
作付し大法院白状の社家より頼めしより
社家式人町奉行所官公事等入牢中村敷及詮議
波ししとも皆禁め人致し後之に向伏見殿
に存する人白状せられ伏見殿に院出願
る年月迄致し年月の指し先折札掛り心
低く申渡り恐礼斗しく還拂有るより又十是
と御免之

七清苑近々以答ハ糸内門ハ拍ハ誰展糸内高ト
子乳を撒ケ又日敷ト糸内猪子ハ育ト子乳を
撒ケ其日ハ糸内新紋奉ルト云々

小方之里の池に是も赤井越ありて撒りて山動
以味没下没ホ是をんふとと之も中たやと
怪ふ事不叶是も近玉の百姓を難免に成る
眼前に又越前も版に人々もあやうき油上
納つておれけり國列油高貴没ともの一々
持る事年九拾圓免上納に中付る小百姓は納
まざる油高貴版ありて之低に地油少く事
少く油に貯るに仍て戸中天明六年六月以
油ふくく法人難免に及り没に天下の山を
らんもの之万民と浩の皆天下の事と其の種
是皆免版の没と之次子川上水の流け上水

二流くく多摩川の水と一之流に水道を
そ安の以人々少く堀樋とぬせり由井
堀堀の時ふると是お止りて山家も松平伊豆版
に此作没るも伊豆版町事乃和事なるも其版
子川上水お止りて其後多摩川神田のあふ
津に外山用金と多く入形又出る金之堀に堀木
へ来る水は是成に性にたつ時火ふたる事眼
仍け上水お止りて天明年中に人々多し投
大隅も版に水堀に火防ふ世人と事と是
堀る水少くく泥水同く之に上水
撒る水少くく月と事の中

此程非道の之付之然、儀事、此程前、此程、
地面、此程を借家、此程、此程、此程、
此程、此程、此程、此程、此程、此程、
此程、此程、此程、此程、此程、此程、

田沼主殿、此程、此程、此程、

附醫者、此程、此程、

此程、此程、此程、此程、此程、此程、
此程、此程、此程、此程、此程、此程、
此程、此程、此程、此程、此程、此程、
此程、此程、此程、此程、此程、此程、
此程、此程、此程、此程、此程、此程、

此程、此程、此程、此程、此程、此程、
此程、此程、此程、此程、此程、此程、
此程、此程、此程、此程、此程、此程、
此程、此程、此程、此程、此程、此程、
此程、此程、此程、此程、此程、此程、

針と刀をせしに糸の中にわしこく密用しく拾七八葉
この近育しく有る名何の療治をさうも人指す
の妻よりあ眼痛しう某探針を打又療治せし二タ
月半とされしつゝあくあ眼をさうつゝと使はる海
にさきあ眼のさうつゝにんさうまふあ人指し
名成伸助と改筆筆も情出さうつゝと後さう山
子代と成内邦さう後方奉け伸助さう元為さ
随ひさうさう山盤昌の以主殿に後人金子さうお貸
さう金さうあくさういさう年安の元におさうさうさう左
奥向さうあはと改改さう他さうさう山又二葉利立七八
年さう内さう七さうあ余の借金と成さう馬さう女房の

吉原の女帝と情出さうさう人知さう伸助と密通
波居さうさう誰咎さうさうのさうさう左能さうにさうさう
居さうさうさうさうさうさうさう知さう伸と伸助は目求情
に某程見世と出さうさう伸助の以主殿に後人出入と
あり桂川のさうさうさう余程賢さうさうさうさうさう
さう山創さうさうさう山氣さう入見世成の伴ひさう山重て
靴さう他さう馬山接接さう利道判のさうあさうさう
山仕金さう成さうさうは義も誠ハ伸助と主殿に後人
振さうさう山仕金さう仕さうさう主殿に後人さうさう余も
備はさうお成伸助さうさう山さう後家と神金法衣類
其れさう近一不さう我者山に女房さう改さう改さう

之が殿玄菟殿中より入つてゐる醫者成
子に渡つて右の上へ小恙とのりもする時主殿
と回つてゐる主殿頭をおよ何の告のてゐる
中よりこれ皆く実を同くする者人乃面を
殿の下り人や進くと待居る者主殿頭殿中
何れも殿頭なる退き給ふ者又人の面を捉力る
主殿頭より命ひ中より暫くおとす少くも
殿中よりその細い余の儀に非ざる殿中曲某
此元苗町送回あり某成某元より此病氣を
此大切之恙の家方お我より告給ふその時何
次は此世儀や何と告あつる主殿頭殿中より挨拶

となく居られける皆く此迄言取ると膝立並に
ある時何れも殿中より押入中より入る人
極く便之云方極く大切と打ち物路を敷後
かつて各々始中拙造と難儀に上告る、眼
先々何れも上告る後刻何れも上告る、眼
中より有るは主殿頭殿中より告る、退出
させし中より今云主殿頭殿中より告る、只一歩
ぬきとられし小恙小能くの中にと主殿頭
の縁敷政を新しと没替致する仁もする所
ゆふと子延せし、世を延し、世を延し、世を延し
此大切之物路を敷る、理をかんく、子延せ

名医は金銀出世し心まうし一葉斑猫紫地の新ハ
とまじとあり其病は為る葉成りく或小便を
面或食するをすはむし杯く煙と病をまじする
是醫道の法を肖る名医の技と處とを記されハ
座中へ面を暫く息をとりあがりて次は夜をまじ
所も中よりハ尚書白山葉は掛るがくまうと時の
将ふととなる殿の殿に或貼法なる山葉一貼
垂りり山月と掛るやと記されハ水野出羽も夜を
山葉と記されハ玄葉夜中よりハ山月と記され
と殿の殿に親敷されハ山葉山月と掛る難成と
記されハ親敷と記されハ一葉は出羽も夜と記され

と記されハ安藤對馬も夜中よりハ玄葉夜中よりハ
山葉山月と記されハ山月と記されハ山月と記され
あり入用と記されハ山月と記されハ山月と記され
心は山月と記されハ山月と記されハ山月と記され
あり上ハ山月と記されハ山月と記されハ山月と記され
出せと記されハ山月と記されハ山月と記されハ山月と記され
と山月と記されハ山月と記されハ山月と記されハ山月と記され
相又曲則甲斐も夜中よりハ山月と記されハ山月と記され
取次依役も夜中よりハ山月と記されハ山月と記されハ山月と記され
荒増お初と記されハ山月と記されハ山月と記されハ山月と記され
致しと記されハ山月と記されハ山月と記されハ山月と記され

少く中時々天下の人心辱之其法も法没入の意中
若年安くは目鏡少く是を中時老中若年安く
上没も目鏡少く是を中時作付る白殿頭も何れ
悪者彼少座は是天下の目鏡遠之依りて其
安少く不中しとるこれ一座の面も甲斐也其の一云
か下る時と投社越中も殿中も其の只今甲斐也
中より海りある主殿頭も其の告致順る知
ふ一依り座中の面も白殿頭より其の理非道成
之月法運上へ依りて思召る急せざる事た何れ
名方不云く其の内中上座と有る時と松本
何れも其の中より其の拙者越中総主中場活義成

拙者其のいふ事と何れと白殿頭も出入の名け地も
安かぬなる事と其の主殿頭も其の白殿頭より
拙者上り其の是非其の拙りとも今年の出水とて
押流とて之を又其の字も余も田代も其の拙者
見ゆ其の出水後夜も其の用金其の白殿頭も其の
少く其の在基も其の延法も今少く其の金入も其の
其の又堀割も其の水も其の往和格の海端も其の
余の丁浮も其の中も其の沙入の種成も其の余程
の上飛も其の中も其の時も其の安殿對も其の中も其の
其の安殿越り其の田代増出も其の越りも其の没候も其の
其の中も其の若年も其のされ其の新田も其の若

里評定赤井越前より油運上安合事
時九月間月番松平周防より安合評定
有る松平伊豆より赤井越前より安合評定
赤井越前より油運上安合評定
又同様に油運上安合評定
事大々採七百余小々採子百余人より油運上安合評定
中上より採子何程の上納より成り安合評定
計九拾目宛より成り安合評定
多の成り後より何程の上納より成り安合評定
分り事より成り安合評定
成り安合評定

荷極より成り安合評定
の上納より成り安合評定
下年小々採目宛より成り安合評定
時より成り安合評定
をより成り安合評定
也に地油より成り安合評定
事より成り安合評定
油より成り安合評定
事より成り安合評定
是より成り安合評定

身を勤む身が如く今迄は我れが
 情をなれし方のくまを妻とて面
 面せり。衣被を兄督曰く麻と下
 の上より切被を流石の公に納り
 たるもの

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, slightly discolored paper. It appears to be a single column of text, possibly a letter or a record. The script is fluid and characteristic of early modern European handwriting.

Handwritten signature or mark at the bottom right of the page, consisting of stylized, cursive letters.

Handwritten mark or signature at the bottom left of the page, appearing as a small, stylized flourish or letter.

